

櫻の首途

古

特別
^5
6590
3(2)

• 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 1 2 3 4

へ5
6590
3-2

筆氣

けとううねぬえやにとく

ひまく帆のけ源サお家

たま

- おとよまれ故ひれ夕月

ねぬ

冬緑

トトト
秋晴ほの方や

霞儀

ねぬ

岡山

あや

せと旅中と観るにいへば極くは
ふたと云ひてゐるが最もも
ちと雖はまう極度の
かくか月日よりおまひ入る
われは尋常の老うと見てね
さすと年少の歎ひとかく山
政とそぞく極くひやうじゆ
力のよみぐるとあくめ化を、
あたそくれて是れ食事ある
ゆかあたまをとひゆくされ
まことにきわむらうせと

吟一のひきまほのよかに
まきて御まつたりねりうる

かどものうはす城は益麻る

かひととおとてはるはま

くは遠在らと訪ひ

ゆかに野鷹山とたはま

古事記

枝手立ちとせかとすゑと

才詰

くえて牛の引葉扇子を

何處せうえもあはれゆく
また樹木の名は多有る
跡は見えねりもたゞて
すくとまつる

あくわくとまつる

古事記

折りまた軒のねに組む
六句表

冬はまた可憐なやうの蝉 絆蝶
うるさいふよおのん 古事記

城跡のあそび亦と今まて
まし合せするむくろきる 一折
一篇も二の鳥の速も四月
筆のくじれをさめりす 筆

名録

景樂山やまもひくまのね 一折
被あたせあつたりまき
流ねのゆよねれあじ川の

きのう別荘の様子

古事記

すくわく宿泊の人の多めに
私のうち聲をもて相手

私

宿中吉乃はまた浴と幣と桜の御食の
写動火や馬車馬心様が
くらはと觀るにありや
今神祕の不思像がと發はる
ほほの引ひを感む

伊豆の山や海にあれを

也

よのあまくはなめくはなめくはなめくはなめく
伊豆の山や海にあれを
食田うるま道すにはねえ
さくまほれうさかと市中の屋敷
川く、まよはて面に田圃ひづけ
えぐれの一つうつを

古事記

孟にそばうけて鳴所うれ
まことすれし知ぬ姓姓

松浦

お月の下りあくよけく

マツリよ郊外れれ風景と舞を

お祭り

赤きふとあるは紅色やあああ

わざとよされゑよ郊云 梅月

お祭り

紅花の

アホの垣う木と廊ぐ

細よ改きよと多く族人

薬草

雨と文波よくやや詮ぐらん

松雨

岩に纏うる緑の葉アヤ

草の

ゆううれやと約略と実と

巴ト

小山の口に門は鬼行 子階

子階

ウテ里の月をむづれふのりよ

お外

あもも等あくねの西とむ

魯菴

仰の筋うとすすりハ腰うう

地國

おぬりじ荷馬の代

路波

え今いだて冷ひき凍柿

仁葉

ふまたさう壁の早

鶯荀

らちあれ橋と擇る小瓢箪
やうくの便といふる 梅例
極はまきまきとて廊下 嫌内
遠ありあ國もの橋 黒毛
もよけとはひかの端されど 貞持
相うちてゆふひがり いわ
トふゝの約當の只ひり
すも あるたゞとせ解て舟
疏舟

喧れハもひやうるゝ事 疏略
温泉は草木のふると月あ
れまたきむ室のありれし 疏毛
ゆくとゆきハ遠れまほ 龟石
うふゝの漂泊の行をわあこ
そへたかくみきぬせな 金甲
下ふるよりお跡の方遠、 芭
目うへてはいが居とお
松内

アツニタスルシテ月ニシテテ蝉
ち貞

アツリヘト網のテ捨

嘎鳴

達メシカシの活潑れ葉を

如鵬

若界のキナヒラハシケ

冥鵠

アツヌニツルカシム小凡呂

有極

アツヌニツルカシムアツヌ

天石

アツヌニツルカシムアツヌ

子雲

アツヌニツルカシムアツヌ

稚室

アツヌニツルカシムアツヌ

稚室

おひで

丸ね

アツルのアツトミムヒトモ

萬葉と字羅とアツテ管レ火

支那

アツクモアツカヘ物カム

柳亭

アツクモアツカヘ物カム

柳亭

アツクモアツカヘ物カム

柳亭

アツクモアツカヘ物カム

柳亭

まふの醉の心事に付
故郷にかへるはるゝ口
すやうとてしゆれども嘗
或ひは盡りたるをよ
やめよ哉とておもひる者
利くはれどもかくはる者
この心もあれハ每 日
此處方からまほ葉をばくら
朧月

宿の心事とせりと見え
もしやう波をしたてゆる
空一無れ友とぞあ
セラ精うとてまはるれ
家をとめにまほてふ 桜子
あゝかとゆのむすび
心をのちうはるはるは
久一ゆきとゆのタと
和凡

あゆみに舟のと赤葉をくわ
ぬ浦より歸てもれどもか
きく鶴のさゞめ勧る 六二
かく磨く練め波やくは
うつとみておれまよ 春之
月も暁やハ躍りはめや 巴觴
をふくへと西山のあそ
うおとよ面月じく森うて 宿

えすあつひのあくまよ 麦里
いつほりあがふくと車ひ 桃木
渡し捨ててあらやま 穀秀
むれ音のこゑ小袖と被ひ 仓库
すまふひくは聲れ声 犬

名録 四季

まむぢやれづてわ荒涼の雪 杜雨
かよとれのとよお様と 子峨

有處へ船のみもあらむのち
ちり今よて舟すしゆくやまを 合浦
千網（シラメ）縣のるもがなのとき 自村
をね青れ候もとよや村落魚香 巴觸
笑に並ぶて乘れハ一葉れ 朝貢
よと移る波うきうきまつま 次山
ふきとタクルがくは葉うる 及虹
極はあり月漁うね舟とすりぬ 返川

移あせたまふれど以テ斤瓈（ケキ）國ケエ
様えや堂あひある水のぬ 芳は
やとおひぬかすると一文す 一ね
參はすくちとからまつまつ兩 公雀
移やむくちと神代う 松窓
號松の人にまづいばの月夜下 おど
ウミやをねゆくとほりてう 箕萩
おも一あづまく雜事

」あくまどりの水路ノ 棋又
をぬねしゆて落葉をむる 指月
だらくまの徑カサガモも あふ
山里れ入あはう ちのき 芦齋
枕巻と風よとすや也 金丸
あくまやはまやかよ酒ち 和丸
錦とハ野ニ城にて入是 紋川
かくじあわせの月おひ 子闇

うるゝとてアメロコシテシロ葉れ 嘉日
竹の葉の落葉をむく ものとまつ #黒鳥
牛ほくねのあひて枯野づる 僧仙鷗
そがキト落ハシムとぞとがう珍 今ノ様吹玉
纏のまくとて江波のうら下 船主孤舟
橋に画する書をせせざる、孤舟
まわに川筋をうきふる、摩沈
あらの度とまくをまく、孤舟

お引の細くまきうすもみれ、亀石
まゆは壁かづけすをあ、紫波
行ぬと画あかさんゆア、金剛
いづきうちうちを新ひど 楠川
ひきみてあひよすかの月えト、六ニ
手まわらと並ばくとも、荒凡
至の群よやせんやねのうれ、まき
り面にあらわゆがほんやか、笑一

とちたてておひでひめあらぬ
蒸のどちらや鹽に活テ鱈
さまれるや枝村はふち賣
竹切り日おとしませむを
ハ章の詔文のみに田植の雨
屋持の足かゆまきも禁用れ
ほくとすまつゆア高ノル 嘴峰
草のあひゆかや屋の声 仙勝

夏月やね袖つゝは月梅
梅のうちよりてお箋有梅
夜すすむか月の月たる
簾まかくよ梅に匂ひる
入月にやれか月か月月
なのまん遠かとお仕仕よ
き育ち里さとへどかく
まよわあはれのものも
糸いと

行ゆきまくらへ又またせせらぎふ
今ハ麻まく圓まんやつ圓まんの草くさ一水
すゑもへもせきりひの木
を捨すてまう松まつのやや木き
せぬやれもひく人の声
かるらんらんは乞うめの聲こゑ
じう木まきのなきととへ車くるま 細ほ
がにかかありと様ようのあ 柳亭

お月の夜而思を附とまつゆる
やうにちてこひが何うりんをと
はうれしにあらかじめとうべでと
和うるまうのせなむるはま
達ちてりと移へおとまのてくまん
せやれどすがとくねに
もとれそなまどりしきう
ゆひとせせとちひくく

壺よおれりきのむ袖れ香

ふくろ 猫歌 とくひの香

佳風房

作別

是ひとえて山政よかくゆが望
木下宮あるひは空うねとはくと
さくらなるうねは作長谷口とあ
ハのむすめあやおまくやう
おきてまほと解おぬ

居心地の軽うとややかなま

外だされ様とする

まよするまよる歌やみやび

音

ふゆかうはくのやぢくわら
ちげくるぐれのほーく

ふくろへてほれてなれかく

作州猿とさく丘^{カモ}のあハは
山深くひよれ津とるさくさく
たのあに鬼の巣とお十^トすれ
巖^{ヤハ}をひいて穴深く晴く
まづ木とくに窓とあくが只
自じくらうとうこ

下宮の冥途とちゆの道

15

まつみの旅とくの郭

16

鬼切込とあるとて

まつみやまかまひゆの坂

17

支^シ作伯^{エタク}と名ふ鬼峰又^ア
は十角^{トコ}に折峰^{ハサフ}としの鬼^シ方^カて
老^シかむとあるとす^ス藍^リと産^ス
う^スありと蛇^{ヘビ}とふも^ハ似^ス
ちのむじのひきくじとくじと
人とわすかくとくじと

ソノト

様魂のから翁、もとまゆる
まくややや鷗、ひて八月雨
よしうち四十里の山ほどゆく
伯列、ヨリムハと月をかう

あやきとえゆふと遠くはな

也

伯良

朱子

おやれと「むんと」お手すり
おとづはぶらうと身を答の
あまてとせられて別荘と身を離と
やめられぬりへや水りぬの身をさ
えのよハ餘浪のひやたを鞋と傳
ひよハもとどみえてだとます
是能得の変化うすや

涼風よおれ宗をやれよ

古事記

えひやとをよほのふれ

千家

おひよと大日堂のからひて

玄蕃

大二つ物

名録

眼ノに鼓鐘もとてゆる　柳うら　千家
ふうてハ又おくるよ暑うる　豪

水音亭記

伯州某よりあるを乞ふ者うきあはる
形あるとえばかくともうて水と音じたま
是處すお頃水相と詠する佛志れ作りまわ
うせよに業化とまひし御宿の

麻葉とあへりとあこハ山のれとうておひ
そ鶴鳴スハ鶴のものと識ひまとうる身ア我等よ
あへり鶴とみ書てよとをいとよ田の聲と
連んとまくひづの鳴と舉てうの鳴と
強ひる事あへんと詠へるを並ぶ
こうらりと冠のまとマリヨコラム
ありくと音とあへせ

冰解く

古染房

秋ねり

山中宿

蝶手

ぬるもひよ高伎食やす部ら
祝之やあをせのあと旅破
うむ野よ、とよせん青菖蒲

岸すとぢくねじとまねもと
わよれ返るよれとまよとえのと
一あひ、廻ーかねとすとおは
経わやまうやせの桺 杉

古 た や

雪列 諸行

かてせせの吹非ひつ、ゆめの麻疹
くくかやとよほく鶴笛がみよせをこ
まれば笛とよめあいのねどくたる
あよふを悉に笛を吹き極まよしとばで
かののあゝよんとお内よすわくとく
ひとはやうよとくと謝一がでやうて笛と
笛せな又よしれに景と諱をかの御
きりとくとくと圓ハ吹へぬうよとく
あきよ草へ表列はりぬうゆ

十方

涼やかやゆよ福引くよみうら

古

ぬととてねまあらあらくとく
きのれハ可送のうとく温泉ちう
さひすまもへゆておまは

ゆの利や菖蒲よとくちくわす

温泉ゆれゆよ吉水の行とゆ

古

加賀

む遣「かが」うすむおとせふるに萬
々々、或ハミク又ハ神等て形く儀く
あらあらくばよてみの國ふるおもむきの
今秋もまたハまたたれとおもむきを
今くゆくと月而ゆきとちゆく
すくく今をとふれ聲大古事記 美琴

すくくとゆきと新一今井井

古事記

物 事 事 く聞くもとふは 曾秀

希得よとひからきく

穂をのれの草すらあたふす

右梁方

まれ軒陽一月乾 希得

日への詠笑せりてさはるがれこの秋
鳥うたひをあめくわいゆうへく
あのよどはす今と鳥羽や

左梁方

向ひかわ代やをみれがも
まことひこちる 乾牛 右梁方

いの肩ひよだせたなせあめのあ
路樹うて涼をあそ舞ひこひの風す
かくくもれり

左梁方

十種 文徳傳人草坐ふ
鐘近ひひけてあたま松 肩

左梁方

旭川弓大摩のるるのりあま、
せかをせせまふくすくあくはれと
仰徳よをよとくまくとむにまほ
うのものハんとも金をあはと
あはまくまくにアはれまくま

え亭よゆく

古事記

もの暮る夜のやまとせせし

うち木のせせつてあら

旭川

はをとての里を白毫れりの街
れふとみたあたすの一輪とて
えみかの片一叶画額かく
はくとての里を白毫の

絵をあらすと

がくとての里を白毫の味

われ香とての里を白毫の腰

白毫

短歌

立琴

山の井や約束くつきてさめど

様へとくる木のよれを

立琴

机へれ方があらまふ綿をて

立琴

酒うかくとて唐衣うかく

立琴

なの離とくよに月をす

立琴

ゆきとしのよじのよじ林

立琴

宿もとまるとてゆきのよじ林

立琴

沖とゆ一浪流しゆき
浦ゆかく絶えずよはれ
ちうりとそてんの衝立
落傷てもえの汗の粒五
雅子ハ嘆ひをまゝ叶く
而けりと早廻とを以テ御み
場、こしあざやかとゆ入節
安之
たえくふ業とゆるやく
亦鳴

小まの口詠魂のむりゑ
賓頭盧ハ極れずふれ生縁
旅てあんづる城ノ御幸
石門く月れもねく森くくぐ
言ふひきよし鷗一浪流しゆき
素内も小京御幸れ御
えつひよハツミおわ
おのの取合乾みど是
炭

このやうへよ速の事

而

名詠

歌もものある秘曲と花籠納
玉乃が消ゆかひは江道也
立教の草木にしづてかく袖
と月夜やねのらむことまみ
続よばれりやとまの月 千葉
生や梅の香風よゑのれ
かま芳

あそや時々時々もむ
アミヤシカクシテ泥の鯉
歌くまきぬ不二村わ若よ
五月やいとおもや旅若者
ねむすはるを念す奈川 旭川
かく見やねよしを念す奈川 似川
山の鶴の音がけりこゑは
唐棹五月朝くさかられ 亦鳴

猫の目れ様アヘテシ松原　和得

ウ師のえも文通

リれきのほ更て首尾尾をれ　越前

亦重のせひかはまされ、或而事と
其上一にて御政東の方ハ御

ヤマハタカニアハ先あんづ

あんを連れてどく、ボク

モこれ縛アトリセテ

途竹ぬるなまくちあまき

古霧

かがともく山政事重あよりりて
往自とくへいとすとむ役成行系
御宿のれゆもあれど事やまると
間とねとおまよゆけりきれ
立おゆまよおまけ持度のそくは
いとまよくーーくおと酒持比
ふやううと勢ーー

お繫森山やめく、月之魂一羽古霧

幼村

まよふ亦名石氏、まよふと
まよふと

僕のまへておらぬと
おもひきよしにあらむとおもひ

うへり

古文書

おれまへる月あはれかう

稀に縫うとまくれば香

枕

龜山

文うへやむをゆくゆての障子
りてと謝

木の菊に月がと月に

古文書

西のむらをひのむらと

枕流

木の間善私舍にまくらと、
次に頃柳雅納はいりてか屋の室
よりみの波多と、角の内城に
こゝへと旅の月夜あとわらを

古文書

木の角とれて竹の木の下
生鳴たとむな下木 須彌

短あり一折

あゆにひき下せ給ふ
あくとくも背せしと
ゆもと詰の傍へ坐て
おふらやかのまゝは
麻せらはせに遠くあれ
金はくちやうの秋
ぬすひそひに引まな
神もくまなす禮也サミ
江柳

さゑふる面一のあんや
子わ刺カミのりのりとも
田乐もどはか例とよきと
斬れあひのよばう
一柳

名録

ちづるもさすがれに坐
大々とまほ掲令にせざれ
あねに被能とよや紫シ
桃

鶴アリて山中花火の事作 固有
あふや経きの山て山あら と
行ふかまむちゆと段引 引一柳
えをりと富士と並(や)なま 緋川
タルスアハシム おねが
はるかまくに柳の下うす
立きの山沟ゆきそよびて露
破月

ハ代

今あるも故郷の禪刹とも僕と
れううひ静よ人氣遠ぢるく
ぬ又凡雅と用達の地とね

古塗房

せの音と歎の声なら余り外
月就満がる秋の中 古塗房
静くるるの空氣はわざとれとの
冷麵うるうるの人に供と業と
やうれううういとく

古塗房

弱れぬや墨山やうみ清也
もゆ一叶ハ秋ヒサ外 逸王

ふゆれぬやうふやまゆねたるの
ものゝおは傳承又ハ節人をもひく
ほむすとおへきみが林ひされよ
ひきりれどすよせられて
極而えやうとくらひよ東坡山^{シテ}
ハ代と辞てふゆといひはの大蛇の
代一體の川とさうめの御くわく^{コロ}すらす
父祖お詫なとけたはれもくはくのより
おる／＼水にまづみのゆ
古　情

本次

凡羅^{スル}とあらそはの運氣と

ふむ／＼とすのちよか

立霧

まほやふとお野のゆらう

まほのあくびとあくとあく

ひく

ハ勺表

枕

ゆふゆふとよすとゆふゆふ

ひくと乾くあゆの鞠竹

臺

神 おへきみかたはせひて
宿泊のまの宿の宿がねら
集めにいのくのくのゆえ
書うたうとくに行き長谷
月をかとひかくとくやさく
くわくさまとまむれんく歌く
高川

名録

高木村の里の下りにあがみ
多

正さんとお宿よ和むれ舟
船のまきとまくとまくとまく
主機やりかくとくにせたがく
ホモ
神 じくよほうねうねうねうね
理 持や保りねのねくよ
る苟や保りねのねくよ
け一とくよねのねくよ
せ牛の下りせ牛のね
柳 脇

二刀屋

本流もえりをよきとあら直の
ニモ金やうを想ひたむくらま
シテ

シテ

左寫

ひきのひきの城里のき
持てほしすなはれ

左寫

ちきのあくやうれとがく文を
ひきに雅延とけりもあれば
ひきのひきふかくもる川のまを
あくやの見とみゆきわる

わうれあく見て春とゆ

右寫

ひきのひきニミル月とよ

右寫

扇子に月のひき文を 雅中
馬林などひきのひきにあ
あゆみの许へねんやくよ門れ
持てあくのほくおもとまの
持てあく

右寫

ア龍の身やぬとやあふの聲
あたへぬとまはれの声 東め

右寫

短あり一物

維中

故きくやや暮るも遠の櫻を

植ふせて今春よりお亦

たる

例のまほ／＼とおるとんむら

東明

りよのよあれ複数

直弓

登りやすあくびよ咲て月齋

更宵

ふ用ひの庵丁と研ぐ

室

ひきよしやくわが一せさまゆ

墨な

仕切よりかのの儀さう

せと

おのとく沖て玉兔のひづり

玉削

み詫をとくへば浮湯瘡

龜六

お絃もどと上例の仲るふ

舟舟

たたひよぢくの 緒

年

名録

よゑとうふのひだを葡萄

東明

乾け下りゆくを喜んで月見

直以

物語の事は我とまことに
ゆゑやタのわを標に
もじてゆめの會と成る
お打はせくのわざうれ
きれてハ孤ややを以月
不外のさくはるやくむ
月夜
いもや豊のからむを傳
吾

やまいかがの里へきてゆく
文もろいの稚令とはひはる
ふとつりおもひやまとわく
ニリとよむてすとあがる

ゆくよむよむて凡とも
あた二のあへんよ
まみ

今市

うそておほのうそくらう
おほのうそくらうそれで

ふづくまふるえうきとほじ
ひのまほよとまほあまく

さよひにむらうゆん まく

六勺表

七言

すき様やむに禁ひはひや
ふそくのまつらを まく まく
ソヤシ和食神のれいへく まく
まくのまくわくまくまく まく

れやくめくてくみの月 せう
あらすめ義とくま まく

名詠

まくまくとくとくとくとくとく
まくまくまくまくまくまくまく
まくまくまくまくまくまくまく
まくまくまくまくまくまくまく
まくまくまくまくまくまくまく
まくまくまくまくまくまくまく

大津 完道 大東、小舟と奥と西に
アリスルとあてかで、近所の
中連れとねぶくの宿とれど

大津 完道

仙下

川上と廻る月の聲う耶
月もやのえ聲う橋而
ち館のえをひいと引きゆ
きまくらくとよとほの移進
ぬや

亦海くさりそらふ遊若鶴
之の
き一やくよとよとあ
而う

ヌノ

うち水のさるの遊若鶴 沢月
人のきをひくとてもじはくと 之明
扇やせざるとひきとひきと
碧竹のせざとひきとひきと

完道

山中志

船屋

度のむれほへぬうがわと

水をもゆふれまつて 嘴

とすはまくとくとゆめに利捨と

あら

船のむれの遠くアモカ

おとこまつ月夜にすみも

五と弱一とあがけうす

スル

白扇

スルヤハラをスルシテ候よほ子 もね
候の事にえふるづかせん ひ扇
せんぬいのあくびがやかせん お舟
ふたすくはくらむかくはくらむ

大東

山中志

二株

山中志 やれよとくを一
まくはくのむかの室と古事

なむまくらへるの風ひあかへをせ
風むしとんがせかへておねえ
とれにぬくはのかく月

おとづれの序の一聲

スノダ

お旅がまか舟のうちと
あよちやくはせかへせぬみと
よきのよひゆきあたる

おゆくと高嶺の行か蝉の声

おとづ

また秋と船かとよすの草す

さよをやかのくとよすの草す

高のむよせのくとよす

とよす

うすい風が風あかへとよす
もしゆせの葉の行かよすと

おまへとよ非ほのめむよまよまかがむ
くらはせくくく

大社

大室方

あよひのまみくわて約もゆ
かくハあくこれ凡まちる様自

大社

まよひれりくくし大社 總はま
みき月やのハシタクニおよひ御家
窓納リ一様をハ乍らの様に
毛邊の絵掛が爲る事本

ウト所造言ハシタクニ毛邊り六十キと
云て ひこう言セテモトロ今に置け
もやもと毛邊とゆうふと檜木竹子
毛邊と稱て來れのオコハ強リ毛邊
も神事と極て多くて毛邊
オコハ強リて いはれの毛邊
度あにくらへ

神御の御身也やれど

也

三四

本所民竹ノハ父子とよに正門ノ
セリヨモのまゝりく彼の文が
もととまわゆのやとかひてをば
一本にまゐるとまふる

古事記

あはれねのむかたれども
うなれとまへと筆葉桂く軒

玉声

短あり一物

玉声

せめまと通れ仲らや運えれ

沙翁とまくは月しなまし

玉声

新室にまつもとをまほく
今まハ成れ給ひよく
常ノれとまくはとある
おのとけまよ下まくはと
おの内をハくとすらまじき

玉声

小まとりよもととまくはと
湖もよほまはとまくはと
絆て食へせんと大縁
又可

う

玉声

難初ハ其まて其の後月

ノシテトキの和キ

筆

久録

獨りに往ひ外を余あはれ
系中や柳へよきだる一

初一葉を落せば秋の意
と日本や草木に飢えの聲
をかづすかと細流れ
を

くの山や風沙のそひて
夜の山や夜の山や絶叫声
をもぐるよなやがゆ
残菊や残菊や残菊や
宿一葉が残るが残るが

まの刻そくに彼のちとよみのゆが
おふい高野ひよひくいあれま
かくは天台止むれしる静ト
せよあくまきあらそぞこな
らうあたへ入へ皆へさと休む

寺僧くわき蓮と吉和

十

ねい
短あ一折

まくはりや正れふの心事作
俗すはりはりとてあ
御まとがは日よやまく
皆ふとよみた樵あはる
せみととすの胸とくとく
もと心事作らるゝあら
樵あらじあらんじ神送
猿あらじあらんじ神送
猿あらじあらんじ神送

三中

是れ等々くがうきにあらはす
まもるにれとけよせう
もひり馬からぬけく産煙せ
そそじのをかねゆりは御
金

名深

あらわや紙とくらわんせ
海子をもみくすれると
里雪まで冬に移はく汝子下
汝子

さくらに雪ふるや都
えりゆひゆ半^{ハニ}萬柳
あらわてさくやあらわ
散きやかのやと雪や油
山中
柳立て雪ふるや萬柳
約もや枝ぬるとさくやう
參あんて双六爲モ女守ふ
金

あらへに重荷は往く事無れ
故人承認

立秋

望まむや様は前の事あるも

也

ハ重垣とアハ松山一里あがむ
南にあへてひづるに若傍^{アシマツ}で
黒は木事^{アシマツ}をぞとぞとぞと
伸代の後の道^{アシマツ}ト一里
さかへて深山^{アシマツ}をぞとぞとぞと
猿窓や旅の宿めとあれば
ハ重垣とアハ松山一里あがむ

古場

つゆく火約はまきをあへてゆる

うすいふ中^{アシマツ}を

まちの舟橋のゆきをかへてゆる

古場

みよやかなゆきのゆきをかへてゆる

作列久爾^{アシマツ}ト川^{アシマツ}を

あらへてましにゆく人里^{アシマツ}を

全

是れを

トヨタマヒカリノミコトハシテ
カニシキトガシムニシテアサヒノ
カニシキトガシムニシテアサヒノ
アリ、シテアサヒノカニシキトガシ
シテアサヒノカニシキトガシムニシ
ヤルカニシキトガシムニシテアサヒ
アリカニシキトガシムニシテアサヒ

也

